

ICA Regional Co-operative Youth Seminar 2001



ICA 青年セミナーに 参加して私が考えた こと

高成田健（日本労協連センター事業団）



2001年6月24日から4日間にかけて国立オリンピック記念青少年総合センターにてICAアジア太平洋地域協同組合青年セミナーが開催されました。私はこのセミナー3日目の分科会「青年と地域にとって魅力ある協同組合に」に参加し、フィリピンの青年リチャードアルセーニョと共に報告者を務めました。ここでは私の報告を最初に簡単に紹介し、その後報告では載せきれなかった自分自身の経過や取り組みを記述したいと思います。

私の報告は労協で働く若い青年の一人(三浦貴広さん)にスポットを当て既存の事業所で働きながら若い人が中心となり新たな分野での「仕事起こし」をおこなう経過を報告しました。



三浦さんは東京の三多摩事業所で府中市委託のプールの監視の仕事をしていました。しかし都の緊縮財政の煽りを受け2年後に業務委託が打ち切られることとなります。10人の組合員が働く現場で最初はみな落ち込んでいましたが、話し合いを重ねる内に一緒に働きつづける仕事起こしを自らの手でおこなうことになりました。日常の仕事をやりながらの仕事起こしで全員の理解がなければ進まないものですが、働く1人1人が主人公である労働者協同組合の原点に立ち返り協力し合い、時には深夜まで話し合いをおこない仕事起こしを模索しました。労協は1997年から「新しい地域福祉の創造」のテーマを掲げていましたが、三多摩事業所でも話し合いの結果地域に根ざし人に役立つ福祉の仕事を起こそうと考えました。ホームヘルパーの養成講座を手作りで開催し3回目の講座を終えたあと、修了生と共にヘルパー派遣を中心とした地域福祉事業所「あおば」や「あおぞら」を立ち上げました。

分科会ではフィリピンと日本の2つの報告を受けたあと、小グループに分かれ「どうすれば若者が協同組合に魅力をもって参加できるか」というテーマについて話し合いました。各グループから様々な意見が出され、「学

校教育も含め認知を広げる」「若者のニーズを取り込むなどメリットをつくる」などが紹介されていました。どこのアジアの国々でも協同組合は停滞気味なのか参加者の少なくなから閉塞感を感じている意見が聞かれ、なにか大きな変化を求めているようでした。実際に多くの意見に共通していたこととして新しいことへのチャレンジが青年にとって魅力ある協同組合になるのではというように感じました。

セミナー終了後、労協で参加していた人との懇談会がありましたが、そこでも従来の協同組合の枠組みにとらわれない新しい様々な分野への挑戦そしてそれを協働で創る、この大きな転換が若者のニーズを満ちし逆に若者の魅力を引き出し、そして結果として協同組合自身の活性化に繋がるのではというまとめをおこないました。確かに協同組合はこれまでアジアにおいては雇用の場として日本においては安心安全の食料を公正公平な組織運営で供給するという大きな役割を果たしてきたと思います。しかし20世紀終盤で民間企業との違いに大きな差がなくなる中、さらなる「何か」が協同組合に求められているのではないのでしょうか。

労協は前述の「新しい地域福祉の創造」のテーマに沿いホームヘルパーの養成研修講座を全国で開催しこれからの日本における高齢社会は地域社会で支えていこうと訴えてきました。これまでに3万人以上の人たちが修了し多くの人たちが既存の施設やヘルパーステーションの職員として活躍したり地域のボランティア活動に勤しんでいます。またその中には労協が提唱する自分たちが必要と考えるケアを自らの手で創っていこうという考えに共鳴し、36ヶ所で地域福祉事業所がこれまでに誕生しています。営利を目的とせず、

自分が住む地域を自分たちで支えていける組織を自分たちで経営も含めて創っていこうという非営利・協同の組織が広がっています。

私も2年前に千葉県習志野市で近所の高齢者が気軽に集まれる場所を作ろうと「ならしの地域福祉事業所デイサービスぬくもり」を責任者として立ち上げました。介護保険が始まる前に作った事業所で1年目は大赤字でしたが、介護保険が始まってからは毎月利用が増える“大忙し”の状態が続き、現在では60人近くの利用者にデイサービスやヘルパー派遣のサービスを提供するにまでなりました。ヘルパーのほとんどは近所の主婦の方で30人以上の方がボランティア活動を含め色々なことに携わってくれています。

事業所ができて2年、介護保険が始まってまだ1年の中で毎日の仕事が未知との遭遇であり、また私自身自分の母親より年上の人たちと一緒に仕事をし自分の祖母よりも遙かに年上の人たちに介護を提供することは困難を極めます。介護の分野は始まったばかりでこれが正しいという答えもまだなく、またケースバイケースの対応が多い仕事です。そのようななか、汗水垂らし自転車をこぎながら利用者の家を訪問しているときによく聞かれることがあります。「なんでそんなに若い





のこんな仕事を一生懸命やっているの？」

私は大学時代に近所にあったボランティアセンターに通い様々なボランティア活動をやっていました。最初は何か自分が役立つことがやりたいぐらいの気持ちで始めたのですが次第にその「やりがい」にハマリ充実した日々を過ごすまでになりました。その時の私にとっての「やりがい」とは 直接自分が人と接して何かの役に立っている実感、そしてその接している方からの感謝の気持ちがまた直接自分で感じられる実感、を肌で感じられたことでした。

この「やりがい」は現在の自分にも当てはまることです。高度経済成長を遂げ企業が巨大化する日本において、サラリーマンとして働くことは自分にとって非常に辛い仕事だと考えます。自分がどのポジションにいてどんな役割を果たし何を作っているのか分かりにくい、高度に発達した企業形態になっていると思います。そのようななか現在の労協センター事業団における働き方は自分にとって分かり易く「やりがい」を追求しやすいです。特に介護の分野は前述のようにすべてのケースで状況が違いそれぞれのケースにおいてベターな方向性を追求しなくてはならないとい

う利潤や効率では答えが見つからない分野であり、一人一人が主体性を持ちながら話し合いで進めていく協同組合には適している分野といえます。介護のほかにも環境や育児などこれからの地域社会におけるニーズというものはこれまでの公的セクターや民間セクターでは解決できない問題ではないかと考えます。この新しい分野で若者の魅力を最大限に引き出せる場として協同組合が必要とされるのではないのでしょうか。

新しいことにチャレンジするには常日頃から様々なことに関心を持ち勉強をしていなくてはできないことだと思います。今回青年セミナーに参加して自分にとっての一番の収穫は、アンテナを幾つも持ち広くネットワークを作っていくことの重要性に気がついたことでした。

